

Asian Population & Development

アジア

人口と開発

ISSN 0911-5684



1988・No.26

財団法人 アジア人口・開発協会(APDA)発行

目次

巻頭言

1

「アジアの新たな出発の日」
佐藤隆 A F P P D 議長が
全世界に向け歴史的な発表

2

アジア人口30億人の日

(アナウンスメント要旨)

6

人口と開発に関する
アジア議員フォーラム議長

佐藤 隆

30億人をとり囲む環境問題

13

環境庁長官 堀内俊夫

アジアは30億人をどう支えるか

24

ミシガン大学教授 ゲイル・D・ネス

APDA・日誌

42

(財)アジア人口・開発協会発足並びに事業経過

43

本協会実施調査報告書及び出版物

巻頭言

—アジアの人口と開発について—

アジアの人口はすでに三十億人に達し、世界人口の六割を占めている。アジアは人口において巨大であるだけでなく、地域も広大であり、また文化、伝統の面で多様である。ただ、アジアに住む人々の多くが経済的に貧しいということは、きわめて重要な事実である。そのなかで、われわれ日本人の生活は豊かであり、その大多数がみずから中産階級に属すると考えるほど豊かさが一般化しているのである。

アジアの人々の目が、いろいろな意味で日本に向けられるのは当然のことである。最近わが国では「国際化」という言葉が非常に多くきかれるが、日本が国際社会においてどういう役割を果すべきかという研究は十分に行われていないように思われる。われわれの分野である人口と開発に限りみると、二十年ほど前にはこの分野での日本の国際協力は金額的にみてもきわめて少なく、国際会議などに出席して肩身の狭い思いをすることが多かった。しかし、最近はこのことが大幅に改善されたことは事実である。金銭的な拠出が拡大することはもちろん重要であるが、今後は人口と一般大衆の生活とがどのような関連にあるのか、人々の生活を向上させるためには人口と開発の両面において、どのような政策が必要なのか、といった問題についての調査研究に援助を供与すべきだと思われる。

(岡崎 陽一)

1988・8・10

意義深く盛会にアジア人口30億人の日

ことし八月十日、アジアの人口が三十億人になる——歴史的なアナウンスメントが記念すべきこの日、午後三時、人口と開発に関するアジア議員フォーラム（AFPPD）議長、佐藤隆衆議院議員（農林水産大臣）から、全世界に向



“アジアの新たな出発の日” 佐藤 隆 AFPPD議長が全世界に向け歴史的な発表

けて行なわれた。

AFPPD、国際人口問題議員懇談会（JPF）、財団法人アジア人口・開発協会（APDA）の共催によるこの発表は、会場の東京プリンスホテルに国連関係機関をはじめ政、官界学識経験者、ジャーナリストなど関係者二百人が参加して盛会のうちに意義深く行なわれた。

第一部（発表）は、午後三時から、佐藤隆・AFPPD議長より別項のような注目すべき、「アジア人口三十億人の日」のアナウンスメントがあり、引続き第二部（記念講演）では、堀内俊夫環境庁長官が「三十億人をとり囲む環境問題」と題し、地球規模で進んでいる自然環境の破壊に対し、さまざまな示唆に富む警告と啓蒙の講演があった。

このあと、人口問題の世界的権威者であるミシガン大学教授、ゲイルD・ネス博士が、「アジアは三十億人をどう支えるか」について多くの貴重なデータを基礎に、内容の富んだ記念講演を行ない、感銘を与えた。

このあと午後五時から記者会見があり、同五時半から、JPF会長の福田赳夫・元首相も出席して和やかなレセプションが催されたが、参会者それぞれが、この日を「アジアの新たな出発の日」と認識し、会場は、思い新たにこの問題と積極的に取り組む雰囲気であった。

主な出席者

(敬称略)

〔国会議員〕

福田 赳夫 (衆・自民)	永野 茂門 (参・自民)
田中 龍夫 (衆・〃)	金子 みつ (衆・社会)
佐藤 隆 (衆・〃)	有島 重武 (衆・公明)
鹿野 道彦 (衆・〃)	矢追 秀彦 (衆・〃)
谷津 義男 (衆・〃)	山田 英介 (衆・〃)
石本 茂 (参・〃)	高桑 栄松 (参・〃)
扇 千景 (参・〃)	中西 珠子 (参・〃)
田代由紀男 (参・〃)	三治 重信 (参・民社)
石井 一二 (参・〃)	阿部 昭吾 (衆・社民)

〔来 賓〕

マレーシア国……ラーマ・オスマン 上院議員
インド国……サット・ポール・ミッター前上院議員
国連人口基金 (UNFPA) 事務次長 功刀 達郎
国際家族計画連盟 (IPPF) 東・東南アジア・太平洋理事会
会長 ジョアン・タンブ

〔国際機関〕

国連人口基金 (UNFPA) 広報渉外部長 ジョティ・シン
国連人口基金 (UNFPA) 企画調整局長 安藤 博文
国連開発計画 (UNDP) 東京連絡事務所所長 石樽 利光
〔在日大使館〕

オーストラリア大使館 A・T・カルバート代理大使

〔官 界〕

外務省 金子 義和 国際連合局社会協力課長
厚生省 河野 稠果 人口問題研究所所長

厚生省 内野 澄子 人口問題研究所人口構造部長
 総務庁 三浦 由己 統計局長
 環境庁 森 幸男 企画調整局長
 長谷川慧重 大気保全局長

〔学識経験者〕

黒田 俊夫 日本大学人口研究所名誉所長
 川野 重任 東京大学名誉教授
 安川 正彬 慶応大学経済学部教授
 大内 穂 アジア経済研究所総合研究部主幹
 武田修三郎 東海大学工学部教授
 畑井 義隆 明治学院大学経済学部教授
 吉田 長雄 アジア生産性機構事務局長

日 程

第一部（発表）
 15時～15時30分
 「アジア人口30億人の日」
 人口と開発に関する
 アジア議員フォーラム
 議長 長 佐 藤 隆

第二部（記念講演）
 15時40分～16時10分
 「30億人をとり囲む環境問題」
 環境庁長官 堀 内 俊 夫
 16時10分～16時55分
 「アジアは30億人をどう支えるか」
 ミシガン大学教授 ゲイル・D・ネス

第三部
 17時～17時30分
 記者会見／カクテルブレイク

第四部
 17時30分～19時
 レセプション



多数の参加者で埋まる会場

アジア人口30億人の日

「アナウンスメント要旨」

人口と開発に関する
アジア議員フォーラム 議長 佐藤 隆



アナウンスメントをする
佐藤 隆 AFPPD議長

ご列席の皆様、この時間ご多忙のところをお集まり頂き、有難うございます。

私は、人口と開発に関するアジア議員フォーラム議長として、本日世界に向け「アジア人口三〇億人の日」のアナウンスメントを行ないますことをたいへん光栄に存じます。

先ずはじめに、国連人口部の最新データから推計致しましたところ、本年一九八八年八月十日、グリニッジ標準時の午前〇時四十七分、アジアの人口が三〇億人になる、という結果ができましたことを発表させて頂きます。

昨年七月、世界の人口が五〇億人を迎えたのですが、それからほぼ一年後にアジアの人口は三〇億人を迎えた訳であります。アジアでは、一年間に五、四五〇万人、毎月平均四五四万人、毎日十五万人づつ増加しています。平均して毎秒七人の赤ちゃんがアジア地域で生まれており、また同じ一秒間に二人のアジア人が死亡しております。その内の一人が三〇億人目の新生児であることも考えられるのです。しかし、私が今日ここでエイシャンフォーラムを代表して皆様に申し上げたいことは、三十億にいつなるか、どこでなるかということよりも我々が住んでいる、このアジアが人口三〇億人を迎え、この三〇億人が幸福に暮らしていけるかどうか、その手立ては十分行なわれているか、また更にどのような手立てを必要としているかなどについて、皆様にも改めて考えて頂きたいということでもあります。アジア地域では、一九二〇年代に人口一〇億人を突破し、世界人口の過半数を超えたことに大きなショックをうけました。以来、アジアの国連加盟国は、人口問題を正面から取り上げたがらない国連に対し率先して働きかけ、一九六九年、国連人口基金（UNFPA）を設立するに至りました。その設立をみた時点でさえ、人口問題は非常にデリケートな機微に触れるものであったために国連の通常予算から家族計画支援のための支出を直接計上されないようにと、UNFPAは国連の独立した基金として設置されたのであります。

しかし、それ以降、一九七四年のブカレスト世界人口会議、一九八四年のメキシコ国際人口会議で、世界の国々は急激な人口増加がとくに発展途上国の社会・経済発展に悪影響を及ぼしているということに大方が合意致しました。

この間、我々立法府議員は一九七九年にスリランカで「人口と開発に関する国際議員会議」を開催して以来、この人口問題解決

にあたっては国民を代表して国家的な施策に関与する面と国民一人一人に直接対する面との両面をもつ立法府議員が、それぞれの国民の理解と認識を喚起しその実行努力を率先してすすめなければならぬ、という一致した見解の下で、各国レベル、地域レベル、また世界レベルで積極的な努力を続けてまいりました。

この重要な問題の先駆者としてのアジアは、第三世界の三つの大陸のうち、現在では最低の人口増加率を示しております。アジアの人口増加数は未だ膨大ではありませんが、それは人口増加率が高いためというよりもむしろ人口の絶対数が大きいということが大きな理由となっております。アジア各国の認識と努力、家族計画の画期的な成功により、人口増加率を下げることに成功しつつあるものと考えます。

とはいえ、世界の人口は現状のまま推移するならば、現在の五億人から二十世紀末には六二億人、二〇二五年には八五億人になると推計されています。このうち、先進地域の人口は、今世紀末に十三億人、二〇二五年に十四億人と、あまり大きな増加はみられません。発展途上地域の人口は今世紀末に五〇億人を超え、二〇二五年には七一億人と極めて大きな増加が予測されています。一九五〇年から一九八〇年の三十年間に世界人口は約十九億人増加しましたが、その八四％は発展途上地域における人口増加でした。また今後、今世紀末迄の世界人口の増加の九二％は発展途上地域での増加と予測されています。

過度な人口増加は、先ず地球上の有限である食糧、資源、エネルギーの不足と国境を越えた環境破壊をもたらします。この脅威は現在および未来のこの地球に生存する人類の生活基盤を脅かすばかりでなく、文明社会を、また人類のために有効であるべき技術革新、経済開発努力さえも無に帰してしまう力を有しております。

す。

今や、先進国と発展途上国の利害は共通しております。人口、食糧、環境、開発問題の地球的レベルでの対応なくして世界が平和な二十一世紀を迎えることは困難であるとさえいわざるを得ません。

そして、この問題の六〇％という人口のベースを抱えているのがアジア地域なのです。アジアの人口問題解決は、世界の人口問題解決につながるといっても過言ではありません。

まず、経済開発・社会開発に即した、適正な人口増加率を保持することが必要です。

先ほどアジアの人口が毎日約十五万人の割合で増えていると申し上げましたが、その増加している人口の質と生産性がどうあるかということはいへん重要なことです。アジアの途上国では未だ乳幼児死亡率および疾病率が非常に高い水準にあり、効果的な保健サービスを着実に整備していくことは、人的資源への投資を含めた国家の開発能力を築いていく上で不可欠なことであります。

また、アジア諸国における人口分布の現状としては、農村地域から首都圏への著しい人口流出による過剰都市化が大きな問題となっており、急速な都市の成長は深刻な都市行政問題を引き起こしてきました。都市生活には住宅、交通、上下水道など、インフラの整備が必要ですが、これを急激な人口増加に應じて直ちに拡充することができず、失業、低水準の住宅、公共サービスの劣化等もたらされています。都市人口の増加は、人口の自然増加によっても生じていますが、農村からの流入人口が大きな原因となっています。アジア諸国の農村地域で高い出生率とその扶養力の不足から過剰となってくる労働力の都市部への人口流出を食い止める施策を見いだすことが大きな課題となっております。

農業の振興と農村の生活環境の整備を進めることにより、都市と均衡のとれた農村の発展をはかることが食糧の安定供給の観点からだけではなく、都市の人口問題解決にとっても重要と考えられます。

アジアにおいては新興工業経済地域（NIES）が急速に工業化を進めている一方、食糧増産に力を入れ、その結果自給体制を確立したといわれている国もありますが、急増している人口と経済成長をみた場合、国民一人一人が生活水準を向上し、快適な生活を送れることを約束されているとは言いがたいのが現状です。

先月トロントで行なわれた先進国サミットの経済宣言の中でも、『先進国・発展途上国双方で農業の構造的問題があり、一層の政策努力が緊要である』との共通認識が示されていたことは、皆様のご記憶にも新しいことと思います。私、エイシャンフォーラムの議長として、また日本の農政を預かるものと致しましても、アジア諸国さらに世界というグローバルな視点を持って問題に取り組んでいく必要性を痛感しております。

また、人口問題には人口の年齢構造自体が変化することにより発生する問題があります。国連推計によると、世界全体では年少人口の割合は次第に低下し、反対に老年人口の割合が増大すると見込まれています。どちらかといえば年少人口割合の低下のほうに急速であり、その結果、生産年齢人口の割合は一九八〇年に五八・六％であったのが、今世紀末には六三・八％と高まるとみられています。

先進地域においては既に高齢化が始まっておりますが、将来は発展途上地域に於いても高齢化が進むと考えられ、現在の発展途上地域における生産年齢人口の増大は、その前段階であるといえます。発展途上国における次の課題は、現在高い比率を占めている

る年少人口が経済活動年齢に達したときに生じる雇用と失業の問題であり、やがてこの年齢層が老年に達したときには、高齢化問題に直面することになります。こうした年齢構造が引き起こす問題は、その波及速度が加速化されており、その対策が急がれております。

このような変化に対応するため、アジアの国々は若い労働力の吸収、農業生産力の改善と工業化への一層の向上と発展、教育の普及、保健医療水準の向上などをはかり、人々が平和で幸福な生活を送るための、社会・経済開発の基礎づくりをしなければなりません。

人口問題解決の最終目的は、全ての人々の福祉と生活の質の向上にあります。

その他、視点をかえてこの人口問題をみるとき、あらゆる問題が絡んでおります。後程、堀内俊夫環境庁長官より、またゲイル・ネス先生より、別の角度からの問題提起と提案がなされることと思いますが、いづれにしても今我々アジアが抱える人口問題はアジアのみに存するものではありません。アジアが人口三〇億人を迎えるこの時、我々アジアの国民一人一人が、この現実を「アジアの新たな出発の日」と認識するとともに、世界のあらゆる分野の人々が思いを新たにし、積極的にこの問題に取り組むことが急務であることを重ねて申し上げます。

更に、付言して申し上げます。私は、人口問題を論ずるとき人間の幸福の単位として「家族」という核を見直し、再認識すべき時代に来ていると考えております。個々の家族を核として、家族愛が隣人愛に、更に地域愛、国家愛、そして地球レベルの人類愛へと発展して、世界の平和と繁栄を築いていく、この考え方を基礎にして、今までの家族計画というものを更に広義にとらえてい

レセプション



レセプションで乾杯の
音頭をとる田中龍夫 A
P D A 理事長



談笑する福田起夫氏(右)
と各国関係者

く必要を感じます。
いわば「新家族計画」ともいうべきものを二十一世紀の倫理として、皆で考えようではありませんか。
このステートメントが、人類の平和と幸福の道標となれば幸甚であります。
ご清聴ありがとうございました。

30億人をとり囲む環境問題

環境庁長官 堀内俊夫



堀内環境庁長官

現代のアジアにおける環境問題および世界の環境問題を中心に私の考えを申し上げたいと思います。

現在、世界人口は、昨年の統計によると五十億という、大変な人口です。アジアにおいては、その人口は三十億。世界人口の六割をアジアが占めております。

しかも、この人口は、この三十数年間の間に倍にふくれあがったのです。

今世紀初め、アジアの人口は九億人だったと言われています。ところが、まだ百年もたっていない今日、三十億という大変な人口になっています。世界人口からみても、今世紀初め十六億といわれた人口がまだ百年もたっていない今日、五十億、そして、今世紀終わりには六十二億という推定まで出ています。

私達は、環境の恵みで生活をしてまいりました。人類の長い歴

史は環境の恵みを受けて、環境を利用して生活してきたのです。しかしながら、この数年間の人口増は、もはや環境を自然に利用できる状態ではありません。すでに環境に大きな負担をかけており、いやかけすぎではないか、そのために環境の復元は可能なのだろうかという今日の日を迎えていると、私は思います。

私達は今、生活していく中で、毎日たくさんのお出版物に接しています。たとえば新聞が毎日届きます。またその中にチラシなどたくさんのお広告が入っています。これらを始末するのに難儀しており、新聞はひととおりに読むとみんな捨ててしまいます。そういう生活を私達は送っております。

また、食べ物はたくさんあり、いろんな食べ物を食べています。十分食べ物があるという認識のもと、残ったものは無造作に捨てるのが生活向上の証明であるかのような気持ちで生活しています。

しかしながら、現在皆さん方が生活しているこの東京は、どういう状況でしょうか。

東京は空気が大変汚れています。かつての東京はもっと奇麗だったかという点、二十年前は現在よりもっと深刻でした。東京の森、東京の木は今にも枯れそうになっていました。最近ようやくよみがえってはきましたけれども、東京の空気はいぜんとして大変汚れています。

なぜ東京の空気が汚れるか。地方よりも東京のほうが働く場所があるため、みな東京へ、東京へと人口が集中するためです。しかもみな車を使う時代になってきた。昨年一年間に二百万台も車が増える。その車が東京にやってくるわけです。車に乗っている人達は、交通事故には気を配っていますが、車から出る排気ガスによって空気が汚染されているということは誰も考えません。

そのため、東京の汚染が徐々に深刻になっていくのです。

東京近辺の川を見ると大変汚れています。なぜ汚れているのでしょうか。私達が出した生活雑排水によって川は汚れているのです。二十年前は、川はもっと汚れていました。空気ももっとひどく汚れていました。

なぜか。産業廃棄物によって、空気が汚され、水が汚されています。そのために、日本人は環境を取り戻すために大変な苦勞をしました。

今、アジア全域で、こういう汚染の状態がいろんなところで見られます。

日本は現在汚れてはいるけれども、かつてはもっと汚れていた。その汚れていた時代をようやく克服してきた今日であります、いまなお汚れている。

ところが、台湾、韓国、シンガポール、ホンコン、こういったところでは、二十年前の、私達が体験した非常に悪い空気、非常に悪い水の中で現在生活をしています。それはなぜでしょうか。工業化を急速に進めていくために、より高い生活を求めるために、いろんな環境を悪化させているのだと思います。

私達がいまいちばん反省しなければならぬことはなんでしょう。か。さきに申し上げましたように、たくさんの出版物、また、建材。これら出版物や建材はほとんど日本の木材を使ったものではありません。東南アジアの熱帯林を切り、それを輸入することによって私達は今日の生活水準を成り立たせているのです。

それは、日本の木材を使うと高いからです。東南アジアの熱帯林を切り、物を作ったほうが安いからそうしているのです。言いかえたら、誰かが損をしているわけです。それは、熱帯林の所有者です。

この熱帯雨林の中には、たくさんの小鳥もいます。たくさんの昆虫もいます。たくさん植物もあるわけです。熱帯林がどんどん切られていくと、これらの種はどんどんなくなっていきます。地球規模で考えると、これらの熱帯林のなくなるのは十一万平方キロという非常に広い分野における伐採であります。日本の国土の半分以上の熱帯雨林が毎年、毎年なくなっていく。そして再生しないのです。なくなっていくだけです。

また、私達日本人は、たくさんエビを食べます。今、世界中でとれるエビの三分の一は日本人が食べています。世界人口は五十億、そのうちで一億二千万の日本人が世界の三分の一のエビを食べています。東南アジアなどでとれるエビを輸入するのですから、それ自体は問題ではありません。ところが、このエビをとるために、東南アジアにおいては、マングロウブという木をエビ採取の邪魔になるとしてみな伐採しているのです。そのため砂漠化が進んでいます。

現在地球の四分の一は砂漠だと言われていました。そういう砂漠に加え多くの耕作地域、農業地域においても砂漠化の懸念が年々高まっています。

現在、毎年完全に砂漠化している面積は、五万平方キロ、あるいは六万平方キロとも言われています。言いかえると、九州と四国の広さ以上の面積が、毎年、毎年、砂漠化しているということです。あるいは、それ以上の農地における砂漠化が進んでいるとも言われています。そういう懸念が、今日、世界規模で、アジア規模でどんどん高まっているわけです。

また、地球は二酸化炭素によって温暖化しているという懸念も言われています。

温暖化した場合にどうなるでしょうか。

これ以上このまま放置しておく、二〇三〇年には一・五度から、四・五度くらい温度が上がるだろうという懸念を表明した学者がいます。仮りに、四・五度温度が上がると、北極の水は溶けて、海水が一メートル四十センチも上昇するということです。そうなると、海拔一メートル四十センチ以下のところは、みな海面下になってしまふ懸念があるわけです。

さらに、心配なのは、最近モントリオールにおいて、加盟三十カ国によってフロン規制をやらなければならないという問題が起きていることです。

ちょうどこの東京で言う、だいたい上空へ二十五キロくらい行くと、対流圏と正層圏の境になっています。その境には、オゾン層という層があって、私達地球の生物を太陽から守っているのです。このオゾン層が、最近では破壊されているのではないかと、砕けているのではないかとという懸念が表明されています。

なぜ、オゾン層が破壊されているのか。それはフロンガスがどうも原因じゃないか、フロンガスがこのオゾン層を破壊しているんじゃないかと考えられているのです。現在世界では、百万トンぐらいの規模のたくさんのフロンガスを生産しています。このフロンガスは、この大気の中にある間は、色もないし、においもしないし、健康を害すこともありません。しかも私達の生活には広く使用されています。たとえば冷蔵庫はフロンガスによって冷やすことができます。部屋の冷房もフロンガスを使っています。また、魚などを運ぶ場合に、腐らないようにするための断熱用のトロバコがございしますが、こういう発泡剤にもフロンガスを使っています。洗濯にも使っている、あるいは女性の髪のスプレーにも使うというように、非常に大事な物質です。また、ICを洗浄する場合にも、非常に使う用途は広いのです。

しかし、このような大事な物質でも、だんだんと大気へ出ていく。そして成層圏まで出ると、太陽の紫外線に当たり、紫外線に当たると分解してしまう。分解すると、地球の生物にとって最も大事なオゾン層を破壊するということなのです。

自然の恩恵を受け、人類はここまで来ました。また生活をより向上させるために、いろんなことを考え、いろんなものを発明してきましたが、私達人間が作り出したものによって、私達人間が今逆に多くのものを失いつつあるのじゃないかという懸念が今日ほど高まっている時期はないと思います。

私達がアジアの問題、三十億の人口を抱えたアジアの問題を真剣に考える時は今をおいてないのではないのでしょうか。そういう意味で、今日お集まりの皆さん方が本当にこの地球環境について、私達人間がいつまでも生きのびていくためにはどうすべきかをもう一度考えなおす。非常に大事な時が来ていると、私は痛感をしているのです。

では、私達はここでどういうふうにして食い止めたらいいのだろうか、この懸念をひとつひとつどういうふうにして解決していったらいいのだろうかという問題に直面するわけです。

今、フロンガスの問題を申し上げました。オゾン層という、アジアは当然のこと、地球全部を守っているこの層が破壊されるという懸念に対しては、やはり原因となるところの、フロンガスの生産規制をしなければならぬのじゃないか。さもないと、このままほうっておいたら、現在数パーセントの破壊が、今世紀末には十パーセントの破壊になる。いや、それ以上の破壊になる。気付いた時にはもうとりかえしがつきません。早めに、少しでも早めに全世界で協力しあって生産を規制する、また、使うことも規制していくということがすぐに試みられなければならないのです。

現在、世界の三十カ国がフロンガスの規制をやるということになりました。わが国がフロンガス規制の会議に加盟したのは十七番目です。ところが、規制の実行に関しては、わが国は世界で最初の国であります。今後、多くのフロンガスを作っている国々は、わが国と一緒にになって規制し、そしてみんな地球を守るというふうに考えなければならぬのではないかと思います。

そういう意味から言うと、私は地球規模のモニタリングが一番大事ではないかと思えます。何か心配事が起きないかということに常に監視する、モニタリング制度を作り上げることです。世界の国々がみな協力しあい、私の国ではこういう危険が出ました、私の国ではこういう変化が起きたと、世界中の国々が環境のモニタリングをやる。そうして、みんなが情報を集めあって、その国でできないことは他の国も一緒になって、それをやると。こういう対応措置を地球規模で、世界中の国々が共に一緒になって行う必要があるのではないかと思っています。

わが国は、アジアにおいては経済的に非常に大きな国になってきました。そのため、より多く、世界のことを考える必要があると思います。

私は最近、多くの外国の人に会う機会に恵まれました。その方々から、こんなことを言われました。

日本人というのは、一人ひとりきれいだ。自分の住居はいつもきれいにしている。日本人は外を歩いて、そのまま靴で家へ上る人は誰もいません。必ず靴を脱いで、そして家へ上がります。そういうように、日本人一人ひとり、また、ひとつのファミリーは常にきれいだ好きです。しかしその日本人が地球全体や他の国のことになると、少しも関心を示さない。よその国に対し何かできる力を持ちながら、そういうことを考えない国民であると、

私は言われました。

私は非常に強い衝撃を受けました。このことを、私は日本において講演する場合、いつも最近は言っております。日本人は自分のことはきれいにするが、よその国のことはかまいたがらない。そんなことではいけないと、私は常に皆さん方に話しています。

何が欠陥なんだろうか。日本の教育が悪いのだろうか。日本に宗教がないためにこんなことが起きるのだろうか。私は最近、日夜、そういう思いをいたすのであります。

今日、私達は新聞を読み、そして雑誌を読み、読んだらすぐ捨ててしまっている。その中で、東南アジアの熱帯雨林は消滅しているということを誰一人思っていないのではないのでしょうか。私達の日常生活を便利にするために、世界中の熱帯雨林が消滅しているんだと、しかも再生もしないんだぞということを考えている人はいないでしょう。

だから、それはやはり良くないことであり、世界中のことを考え、地球環境がもう一度もとに戻らないようなことをしてしまつては、私達の先祖にも申しわけないではありませんか。

人類は自然の恵みの中において、自然を適度に利用して、そして今日まで来たのであります。

人口が増えたら増えただけの知恵を働かさなければならぬのではないのでしょうか。私達の富を無造作に使ってしまったらはないのです。最近、非常にうれしいニュースがあります。それは環境週間の時に行われた表彰式です。紙を再生産する技術の開発にたいする表彰でした。私達の国で、いまいちばん反省しなければならぬことは、私達が今使っている皆さんのものを、捨てずにもう一度使いなおすということであると思えます。

アジア全体で、どの国も一緒になって協力しあって環境を守る

ために、日本人がまずしなければならぬことはそれではないでしょうか。

使ったらみな捨ててしまう。これはおごりであります。

富はかってに生まれてはきません。再生できる程度に使っていい。これが持続的な使い方であります。

使い過ぎて死滅させるようなことはおごりであります。そういうことのないように、我々がまず配慮しなければならぬと思います。

また、そのことによって、アジア全体が共に生きることができると私は考えます。

私達の国では、途上国に対する援助を行っております。今年、五百億ドルという金額が示されました。しかし、金額だけではないのでありません。環境を破壊するような使い方のないようにならないと、せっかく援助しても、その金は長い目で見ると死んでしまいます。

みんなが経済発展に役立つことを希望し、より高い生活を望んでいるとしても、それを急ぐあまり、それだけを目的にしていると、私達日本がかって経験したような産業公害に必ずみまわれることになります。

そういう産業公害を私達はすでに経験したのですから、これから私達が海外援助する場合には、環境破壊をしないような仕組みを組み入れていくことがより大事だと思います。

さらに、一番大事なことは、この地球規模において、少なくともアジアから、各国が協力しあって、そういう組織を作ることではないかと思えます。

今、アジアには、三十九の国があります。そのうちの三十カ国まで、人口の増加率が二・〇%を示しています。この数字は、お

そろしい人口増を示しています。これらの増加する人口を支えていくためには、私達が環境に対し、より注意深く、より大切にす
る気持ちで対処していかなければ、人類は破滅に向かっていくと
思います。

人類がこのように発展し、さらに発展させるためには、私達の
全ての経済生活に、環境問題が考慮されなければなりません。

さる四月二十日に、我が国では環境白書が政府決定を経て、国
会に提出されました。

この環境白書の、今回のメインテーマは、地球環境規模につい
てでした。初めてのことであります。我が国も環境について注意
深くなり、そして、我が国の責務はそれだということのみなが自
覚するようになってきたのです。

さらにその一週間後、新経済五カ年計画が決定されました。こ
こに初めて次の一行が加わっています。『我が国の経済発展は、
地球環境が健全であるということが条件に可能である』と。我が
国の経済発展は、地球環境が健全であることにおいてのみ可能で
あるという言葉が一行加えられたのであります。経済発展を続け
るためにはこの地球環境を破壊してはだめだということを、我が
国政府は大きな決意として示しているのです。

さる五月、かつての私の恩師福田赳夫先生が、OBサミットに
おいて環境問題に関する基調演説を行いました。私は深い感銘を
受けております。続いて、トロントサミットにおいても、環境問
題が初めてテーマに上がったと聞いております。

今こそ、私達人類が発展するためには、もう一度地球環境につ
いて、アジアの環境について考えなおすべき時が来ていると思う
のであります。

どうか皆さん方、日本はまずアジアについて責任を持つという

決意を示す必要があると思います。

現在発展途上国は、借款に非常に苦勞しています。借りたお金を返せない国々が世界にはたくさんありますが、アジアでは幸いにそういう国が出ていません。私は今こそ、アジアから環境と融合した経済発展をする理想の国を作り出すことが大切と考えます。

どうか今日のこの日、アジア人口三十億人の日に、もう一度考えなおして、さらに私達のこのアジアを、立派に守ろうではありませんか。

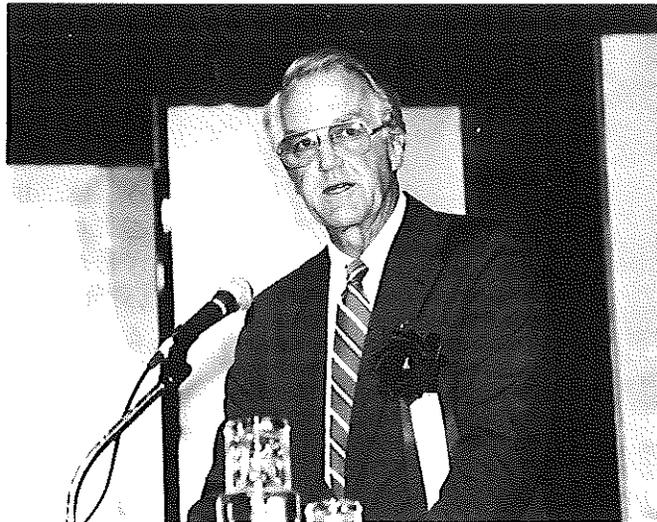
非常に簡単な話でございますけれども、私は思いを込めて、今日の講演を終わりたいと思います。

ありがとうございました。

アジアは30億人をどう支えるか

ミシガン大学教授

ゲイル・D・ネス



ゲイル・D・ネス教授

数字の持つ大きな
意味と関心を

御紹介ありがとうございます。

今日、講演の機会をいただき、大変うれしく思っております。この大変重要なテーマについて皆様方にお話できることをうれしく思います。または数くさんの統計、または数

字を出さなければなりませんので、私の講演は退屈なものになりそうです。先におわびしておきます。

さて、今日は、大変重要な日であると思います。今日、アジアの人口は三十億に達したと推計されています。アジアの人口扶養力を考えるにはまず、アジアの定義を考え、そして人口の数字について確定しているものは何かを調べなければなりません。

アジアの定義には、国連の分類を使いたいと思います。日本からイスラエル、キプロス、トルコまで、全部含めたいと思います。

また、アジアは四つの地域に分かれています。これは皆様方の認識にも一致するのではないかと思えます。東アジアは中国、日本が最大の国で、モンゴル、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国、香港、マカオが入ります。

東南アジアにはベトナム、フィリピン、それからビルマまでが含まれます。

南アジアは、インド、パキスタン、バングラデシュが三大国であり、スリランカ、ネパール、ブータン、モルジブ、アフガニスタン、イランが入ります。

西アジアは、いわゆる中東と言われる諸国で、その中にはキプロスやトルコも入ってきます。

もちろん、これらの地域は、社会経済的な状態が違い、またその人口扶養力も違っています。なお、どれだけの人口を支えうるかということをも人口扶養力といえます。地域の人口密度を見ることにより、人口扶養力を判断することができます。

世界平均では、一平方キロメートルあたり三十六人が住んでいます。しかし、アジアでは人口密度は百二人です。世界平均の三倍ということになります。ヨーロッパとほぼ同じです。ヨーロッパは百一人。しかし、ラテンアメリカは二十人、アフリカはさらに少なく十八人。北米十二人。アジアのほうが人口密度が高いわけです。

また、アジアの中でも非常に差があります。東アジアは一平方キロメートルあたり百六人、東南アジア八十九人、南アジア百五十六人、そして西アジアはわずか二十五人です。

これから、私はアジアを一つの国として話し、ときには地域ごとに分けたお話をしたいと思えます。内訳をお話したほうが人口の増加率についても、また、その意味についてもおわかりいた

だきやすいと思うからです。

しかし、まずお断りしておきますが、アジアの人口がいくらかあるか、将来の予測については確たる数字はありません。三十億という数字もあくまでも推計です。国連はこれまでも現在人口の推計、そして将来予測を行っていますが、評価をするために数字が違ってくるのです。表1には二つの評価が比較してあります。一九八四年の評価と、八八年の評価に基づき、八五年の人口推計

(1,000人)

表1 1984年および1988年に行われた
1985年国連人口推計

地 域	1985年人口推計		1984年推計 と1988年推 計比較
	1984	1988	
世 界	4,836,645	4,825,689	-0.3%
ア ジ ア	2,818,214	2,833,142	+0.5%
東 ア ジ ア	1,319,248	1,249,474	-5.0%
東南アジ ア	399,474	399,626	0
南 ア ジ ア	1,055,892	1,070,282	+1.4%
西 ア ジ ア	112,940	113,913	+1.0%

が出されており、八五年の人口推計が違っていると推定されます。年が違くと数字が違ふということがあるおわかりになると思います。しかし、この表から見ても、やはり特定の数字や、小さな差異についてあまり関心を払う必要はないということだと思います。やはり、その数字のもつ大きな意味さえ受け入れたらいいわけで、なにも精度を要求されるものではないと思います。

アジアの三十億人、そして扶養能力についてお話する場合、たくさんの統計数字が出てまいります。それは重要なメッセージです。そして、三十億という数字はチャレンジであるということです。アジアの三十億の人口は将来に対する大きなチャレンジであり、あと十五年から四十年の間に、私共は、我々が次世代に残す世界をじかに見ることが出来るわけです。

チャレンジは大きなものでしょう。というのは、現在三十億人

でも、今世紀の終りには、さらに五億人増えるでしょう。二〇二五年までにはまだ三十七年ありますが、アジアでは三十五億人に人口が増えているだけではなく、四十五億人まで増えるであろうと言われております。

人口三十億は勝利の数字

では、この変化のもつ大きな意味をお話してみたいと思います。例えば出生力、食糧、農業、雇用、教育、人口の高齢化、エネルギーの消費量などに分けてお話をしてみたいと思います。

しかし、このチャレンジについてお話をするために、やはりいったん過去を振り返り、そして将来を展望することが大事だと思います。

アジアの人口三十億という数字は、我々にとっては勝利でもあることを考えなければなりません。すなわち、死亡率が低下したから人口が増えたわけで、農業の生産高も、教育も、雇用も促進されたからです。チャレンジというときに、私共はチャレンジだけではなく、私達は非常に大きな業績をもたらしたのだということとを忘れてはならないと思います。

では、表2により、アジアの人口の内訳と、それぞれの地域が今後数年間どのような増加を示すかを見ていきます。

世界の総人口は一九五〇年で二十五億人でした。年率一・九パーセントで増加し、六五年には四十八億になりました。そして昨年、五十億に達しております。また、年率一・六パーセントで増え続け、紀元二〇〇〇年には六十二億に増えるであろう。そしてさらに増加率は一・二パーセントに低下、二〇二五年には、八十二億になるであろうと言われています。

絶対数は非常に大きいのですが、しかし、増加率はだんだん下

表2 1950—2025、世界およびアジアの人口

(100万)

地 域	年 次			
	1950	1985	2000	2025
世 界	2,516	4,836	6,122	8,206
ア ジ ア	1,376	2,818	3,549	4,535
東 ア ジ ア	704	1,319	1,564	1,836
東南アジ ア	182	340	520	688
南 ア ジ ア	480	1,056	1,387	1,855
西 ア ジ ア	42	113	168	271
年平均増加率 (%)				
世 界		1.9	1.6	1.2
ア ジ ア		2.1	1.5	0.9
東 ア ジ ア		1.8	1.1	0.6
東南アジ ア		2.3	1.8	1.2
南 ア ジ ア		2.8	2.7	1.9
西 ア ジ ア		2.3	1.8	1.2

がっていることにお気づきになると思います。アジアの全体的な増加率は二・一パーセントです。これは五〇年から八

五年までの数字であり、これがさらに低下し、一・五パーセントになります。最終的には一パーセント以下になるであろうと考えられており、二〇二五年の総人口は四十五億人になるであろうと予測されています。

増加率がずいぶん地域によって違うことにお気づきでしょうか。これはやはり、人口の地域分布が異なるということを意味しています。

一九五〇年、東アジアの人口は七千万人でした。南アジアは四十八万人、東南アジアは約十八万二千人、西アジアはわずか四万二千人でありました。これが五〇年から八五年の間に、年率二パーセントで増加したのです。日本を東アジアからはずすと、増加率は二・一パーセントでした。しかし、東アジアの人口増加率は、日本を入れても、増加率が鈍化しています。東アジアの増加率は、さらに低くなり、二〇二五年までに年率〇・六パーセントになる

だろうと言われています。

東南アジアも、やはり出生率が下がってきており、一パーセント。しかし南アジアは増加率が高く、わずか一・二パーセントまでにしかがりません。そして、その人口は東アジアの全人口を越えるものと考えられています。

これは、東アジアでは出生率が抑制されたということ、しかし南アジアでは出生率が抑制されなかったという事実によるものです。西アジアは年率二パーセントで増加するものと考えられ、全アジアの人口の五パーセントが西アジアの人口ということになります。

アジアの人口の急成長は御存知のように、死亡率が下がったことによります。一九五〇年、アジアの人口の死亡率は、それまでの数百年とまったく変わりありませんでした。すなわち、千人あたり三十から三十五人の死亡率でした。しかしその頃から、死亡率が下がり始めました。五〇年から七〇年の間に死亡率はさらに低下しています。そして、千人あたり十人程度の低い死亡率になっています。

死亡率が低下することにより、一番低い死亡率が東アジア、次が東南アジア、それから南、西アジアの順になっています。もちろん、国の間でも差異がありますし、同じパターンにすべての国がおさまるとは限りません。しかし、大事なことは、最近の人口の急増、そしてそれが三十億という数字になってきているわけですが、これは死亡率の低下によってもたらされたということを忘れてはいけません。特に、乳児死亡率が下がったということを見逃がしてはいけません。

次に出生力の低下についてお話をいたします。

やはり、人口転換ということ、そして出生率を死亡率の低下と

合わせるということが大変大事になってまいります。ここでも相
当な進歩が見られます。

アジアは世界的に指導的な役割りを果たしてきました。すなわ
ち、アジアが国家の政策として、世界で初めて出生抑制のための
政策をとったのです。

この出生抑制の政策には二つの目的があります。マクロ経済を
成長させ、そして国民の福祉を向上させることです。出生率を経
済的な成長、および国家の家族計画によって低下させることは二
つのプラスの面があります。すなわち経済を発展させることにな
りますし、もっと重要なことは、国民の福祉が向上することです。
特に貧しい農村の婦人、子供達の福祉が向上することです。これ
は、高い出生率は常に若年から高年までの婦人が頻繁に妊娠をす
ることによっておこるからです。このようなことは、やはり母子
の生命にとって大変危険です。

貧しい婦人達、貧しい子供達が世界の開発プログラムでいちば
ん無視されていることを忘れてはいけません。

我々には技術も組織的な技能もあり、きちんとした家族計画サ
ービスを提供できる状態にすることを忘れてはいけません。多く
のアジア諸国では非常に良く管理された家族計画プログラムを導
入し、避妊薬の利用を高め、出生力を低下させ、そして母子保健
を向上させています。出生力はこれまでの先進国の歴史にないほ
ど、低くおさえられた国もあります。

したがって、現在の問題は、これらの技術と技能を使って、
さらに集団的なそして個人的な福祉を向上させることです。

コメに目を向けると

また、農業の部門に対するチャレンジでもあります。

それではここで米を例にとってみたいと思います。米は、先日佐藤隆先生が非常に厳しい交渉をアメリカとなさったばかりだと伺っております。

さて、米はアジアで一番大事な穀物であるだけではなく、アジアは世界の穀倉地帯でもあります。世界の米の九〇パーセントまでがアジアで生産されています。

米は、世界で最大の穀物であり、同時に人口の扶養力を維持するためにも大変大事な穀物だと思います。

アジアは三十億の人口といわれていますが、このアジアの中で四億五千万トンの米が生産されています。一人あたり百五十キログラムとなります。この生産高を維持するためにも、やはり米の生産は二〇〇〇年には、五億五千万トンに、そして二〇二五年には六億七千万トンに増えなければなりません。

これは、年率一・八パーセント増、一・一パーセント増を意味しており、全体的には二三パーセント増、五〇パーセント増を意味しています。これは非常に大きなチャレンジだと思えますが、しかし、過去を眺めると、達成できない目標ではないと思えます。

一九五〇年、全アジアにおいて、一億五千万トンの米が生産されていました。水田の面積は九万二千ヘクタールでした。すなわちヘクタールあたり一・五トンの収穫高でした。これが、アジアの歴史を通じての平均的な収穫高であったわけです。

しかし、この百年の間に、アジアの農家は米の生産に関する革命を起こしました。これは緑の革命とも呼ばれています。すなわち、高収量の米が使われるようになったわけです。

日本も同じ革命を一世紀前に行いました。最も米の生産高が高いところでは、一ヘクタールあたり五から六トン収穫することができます。中国はすでに平均で五トンを越えています。東南アジ

アの諸国も一トンから三トンまでいっております。インドでさえも一ヘクタールあたり二・二トン収穫できるようになってきています。

したがって、二〇〇〇年までに五億五千万トン収穫するということ、また、二〇二五年までに六億七千万トンを収穫するということは、一ヘクタールあたり四・三トン、および五・二トンの収穫高を意味しています。これは可能性のある数字です。

農業転換が今後共に継続すれば可能になるでしょう。もちろん、そのためには政府のきちんとした農業政策が必要だということは言うまでもありません。それだけではなく、エネルギーも肥料も、そして化学薬品も必要となります。これはこれで大きな問題を提示することになります。アジアの農業において、エネルギーの必要量は過去十年に増大しています。食量の生産を増大するためにもエネルギーの消費が必要になってくるわけです。

例えば、一九七二年から八二年の間に、農業生産高一千ドルあたりの石油の必要量は百三十一キロから二百二十三キロにまで増えています。

先進国においては、石油消費量はさらに高く、八二年にすでに六百キログラムとなっています。すなわち、農業生産高一千ドルあたり六百キロの石油が必要だということです。アジアの人口を維持するためには、農業を拡大することが必要ですが、そのためにエネルギーがさらに必要になってくると思います。

これは経済的なコストがかかるだけではなく、環境問題にもかかわってきます。

例えば中国の収穫高を維持するために必要な肥料ですが、これは二〇〇〇年までに五千五百万トンが必要であろう、二〇二五年には六千七百万トンが必要であろうと言われています。

ちなみに、全アジアで使用された八三年の肥料の量は、三千三百万トンでした。

米を増産するためには、やはり肥料がもっと必要になってくるということです。これは、これらの肥料の入手だけではなく、例えば水資源である川、湖、また沿岸に対する汚染も意味しています。農薬が流れ出ることによって魚が殺されてしまう。水の汚染に関し、肥料の影響をキチンとモニタリングすることが必要であります。アジアではまだ始まってはおりません。

希望が見られる教育問題

次に、教育社会サービスについても大きなチャレンジです。人口三十億ということは、非常に大きな問題提起ではありますが、しかし最近の数字からは希望が見られます。

五歳から十四歳までの子供達。これは小学校と中学校の学齢期にある子供達です。

表3に二〇二五年までの数字が出ていますが、これは人口増加と出生率低下の影響が端的に出てくるわけです。一九五〇年、アジアには五百万人の小学校の学齢期の子供達がいきました。キチンとしたデータはありませんが、たぶん五〇パーセント以下しか学校には行っていなかったと思われま

表3 1950—2025年、アジアにおける5—14歳人口

地 域	年 次			
	1950	1985	2000	2025
ア ジ ア (100万) 増加率(%)	303	642 2.2	671 0.3	667 (-)
東アジア (100万) 増加率(%)	136	255 1.8	222 (-)	218 (-)
東南アジア (100万) 増加率(%)	44	99 2.3	109 0.6	106 (-)
南アジア (100万) 増加率(%)	113	259 2.4	299 1.0	291 (-)
西アジア (100万) 増加率(%)	10	29 3.1	41 2.3	52 1.0

しかし八五年、三十五年後には、こ

の数は倍になっており、六億四千二百万となつていますが、増加率は年率二・二パーセントです。

出生力がアジアでは低下しているため、学齢期の子供の増加率は年率〇・三パーセントであると十年は推移していくと考えられます。二〇〇〇年以降は、学齢期児童の絶対数が減ることが予測されています。

しかし、五〇年から八五年までに学齢期の子供が倍になったわけで、入学率も高まってきております。

東アジア及び、東南アジアの諸国で小学校の入学率は百パーセントになってきています。また、南アジアの貧しい国においても、学齢期の子供達の半分までが小学校に行っています。西アジアでもさうとう進展が見られており、学齢期の子供達がほとんど小学校に入っているという数字が出ています。これは大変すばらしい業績であり、アジアの政府に対して拍手を贈らなければならないと思っています。

また、将来の予測に対する地域の差ですが、これは出生率の影響を示しております。東アジアは出生率が下がっているため、絶対数も一九九〇年ごろから減ると考えられます。

一九五〇年から、年率一・八パーセントで人口は増えてきましたけれども、九〇年から下がりはじめます。

東南アジアの学齢期の子供の人口は、一九五〇年から年率二・三パーセントで増加してきております。しかし今後十年間、増加率は鈍化し、年率〇・六パーセントになると考えられますし、また、絶対数も二〇〇〇年からは減少すると考えられています。

南アジアの出生率の低下はあまり大きくはありません。増加率は一パーセントと考えられ、絶対数は二〇一〇年にならなければ減らないと予測されています。西アジアも出生率が高くなつてき

ており、学齡期の人口もずっと増え続けます。しかし、東アジアがそうとう利点があるようであり、すなわち初等教育から高等教育へ移る機会が与えられたということでもあります。すなわち、資源を増やさなくても、高等教育を創出することができます。

両刃の剣の雇用問題

雇用の面においても、大きなチャレンジということができません。

表4に、五〇年から八五年までの経済活動人口の増加が示されています。また、二〇二五年の予測も出ています。

学齡期の子供については、短期の影響がもろに出ていましたが、雇用については影響がゆっくりと現われます。出生力の低下の影響も雇用に現われてくるのはゆっくりで

表4 1950—2025年、アジアにおける経済活動人口

地 域	年 次			
	1950	1985	2000	2025
ア ジ ア (100万) 増加率%	680	1,299	1,686	2,111
東アジア (100万) 増加率%	381	737	908	981
東南アジア (100万) 増加率%	84	169	233	327
南アジア (100万) 増加率%	211	383	522	753
西アジア (100万) 増加率%	19	40	59	107

す。

アジアの労働力人口は一九五〇年、六億八千万でしたが、増加率は年率二パーセントで、一九八五年には十三億となっています。増加率はだんだん下がってきていますが、八五年から二〇〇〇年までは年率一・八パーセントの増加、さらに二〇〇〇から二〇

二五年までは〇・九パーセントの増加と考えられます。この期間を通じて、やはり労働力人口は増え続けるでしょう。これは両刃の剣と言ったらよいでしょうか。一方では非常に生産能力があるということにもなりますが、しかしながらそうしたような投資をして雇用を創出しなければならぬという問題もあります。投資なくしては失業が大きな問題になりましょう。これは経済的なコストとしても、政治的な不安定性を醸成するという、大きな問題をはらんでいます。

また、出生率低下の差ということ、アジア地域で見たいと思います。

学齢期の子供と同じようなパターンを示しておりますが、その影響力はゆっくりと現われております。

東アジアの増加率は年率一・四パーセントです。さらに二〇〇〇年から二〇二五年まで〇・三パーセントに下がります。南アジア、東南アジアも同じようなパターンを示しています。

東南アジアはやはりもう少し高い増加率を示しますが、これから死亡率が下がり、そしてその後には増加率がさらに下がるということが期待されています。

西アジアは労働力人口の増加率が高いでしょう。次世紀になっても労働力人口の増加は高いと考えられます。

高令化の傾向

さて、高齢化という大きな問題もあります。

表5に、御存知のようなパターンが見られています。

すなわち、出生力が低下するということは、東アジアにおいては、非常に高齢化が進むということで、南、東南アジアでも同じパターンを示します。しかし、西アジアではあまり高齢化の問題

はないようです。

現在六十五歳以上の人口は、総人口の五パーセントですが、これは過去三十年間ほとんど変わっておりません。しかし、今世紀の末になると、高齢化が進むと考えられません。

東アジアでは六十五歳以上人口は全人口の八パーセント、そしてアジア地域全体としては五パーセント以下と考えられます。二〇二五年までには、東アジアの人口の一三パーセントまでが六十五歳以上になるでしょう。

南、東南アジアにおいては一〇パーセント、西アジアではおよそ五パーセントと予測がたてられています。

これは、将来の予告にすぎません。

アジアにおいては、今のところは日本とシンガポール、そして台湾、および大韓民国が続いています。これらの四国のみがヨーロッパと同程度の高齢化の問題を抱えています。

欧米はすでにこの高齢化の問題に二つの形で対処しています。まず、福祉国家を設立することによって、高齢者の面倒をみるということ。

そして第二は、高齢化による労働力の不足です。北米、ヨーロッパにおいては、移民労働者を輸入することによって問題を切り抜けました。アジアも同じような問題を将来抱えると考えられま

表5 1950—2025年、アジアにおける65歳以上人口

地 域	年 次			
	1950	1985	2000	2025
ア ジ ア (100万)	56	132	213	454
(%)	4.1	4.7	6.0	10
東アジア (100万)	31	73	119	240
(%)	4.4	3.1	7.6	13.0
東南アジア (100万)	8	15	24	57
(%)	4.4	3.7	4.6	8.3
南アジア (100万)	18	42	67	152
(%)	3.8	4.0	4.8	8.2
西アジア (100万)	1	4	7	17
(%)	2.3	3.5	4.2	6.2

すが、解決策は欧米とは違ったものになるでしょう。そして世界がアジアに注目しているのです。

アジアは欧米とは家族構造が異なっているため、この高齢者の面倒をみるコストの解決は、西洋より楽ではないかと思えます。

また、アジアのほうは、移民労働者の問題をそれほど抱えないですむのではないかと思われれます。

大問題抱えるエネルギー消費

それでは次に、簡単ではございますが、エネルギーの使用量と人口増加についてお話をしたいと思います。

エネルギー消費は非常に大きな問題を抱えています。

多くの国を見ると、エネルギーは貴重な外貨を支払って入手しなければならぬものです。しかも環境的な問題もはらんでいます。

と申しますのは、化石燃料の使用が地球の扶養能力に対して、非常に大きな、破壊的な影響を及ぼすと言われていたからです。世界で多くの干ばつが発生していますが、これは化石燃料の使用によるものだという科学者もいます。世界は化石燃料の使用をやめ、代わりにきれいな燃料を使うべきであるとも言われています。また、人口が増えることによりエネルギーの消費量も増えます。とくに人口増加に、福祉を追いつかせるためには、エネルギー消費の増大がどうしても必要になってきます。

アジアのエネルギー消費は、一九七〇年には、一〇六パーセント増えました。そして、ラテンアメリカ、アフリカも同じようなエネルギーの消費量の増加が見られています。

エネルギー消費は、世界で非常に不均衡に配分されています。

先進工業国は、全世界のエネルギーの四分の三を消費しています。

もともとベースが大きいので、これらの工業国の消費の伸びは低くなっています。貧しい諸国においては、エネルギー消費の増加率は非常に高くなっています。

開発のためには、やはりエネルギーの消費が必要であり、これが最終的には、地球の扶養能力に影響を及ぼすことになりました。

しかしながら、明るい兆しもみられます。エネルギーの消費量は増大してはいますが、増加率は、地球のあらゆるところで低下してきています。六五年から八〇年までの増加率は貧しい国において六から八パーセント、そして先進国においては三から六パーセントでした。ところが、この過去五年から七年の間、八〇年から八五年といったらいでしょうか。貧しい国の成長率は三・六パーセント、そして先進国は一・二パーセントとなっております。

また、一人あたりのエネルギーの消費量は、増加してきておりますが、多くの工業国においては、GNP中に占めるエネルギー消費の割合（ドル建て）は顕著な低下を示しています。

一九七〇から八四年の間に日本は消費量を二八パーセント下げておりますし、他の先進国も同じです。アジアでも同じような低下を示しています。中国は三パーセント減、マレーシアは二パーセント減、パキスタンは一パーセント減、スリランカは三三パーセント減となっております。

すなわち、エネルギーの使用がもっと効率的にできるようになったということです。しかし、多くのアジアの途上国、特に新興工業地域では、エネルギーの消費量が増えてきています。これがやはり解決すべき問題と言えましょう。

しかし、人間が動機づけをされた時には、良い解決策が出てくるものです。もっときれいな燃料が必要であるということが認識

されることが大事だと思います。

技術開発で明るい展望を

結論を申し上げたいと思います。

アジアの三十億の人口、そしてアジアの扶養能力について考えると、やはり人口が増えたのも、人口扶養力が高まったからであると云えるのではないかと思えます。

また、三十億人がもたらす大きな問題についても、私共は認識しなければなりません。やがて四十五億人に増加する人口です。

しかしながら、まず我々はこの三十億という人口の抱える問題を認識することが大事であります。問題を列記し、そして、これに対して悲観的になることは簡単です。トマス・マルサスが人口は幾何級数的に増え、食糧は算術級数的に増えるので、人間の将来は暗いと言っています。学者達はどうも暗い見通しを立てるのが好きなようです。

特にアジアの人口が三十億になるといいますと、マルサス的な見方をする人がたくさんいると思いますが、私は暗い見方だけではなく明るい見方もしたつもりです。

三十億いるのは人間なのです。人間の存在価値は子供がなければなりません。これは人間の存在、そして生活水準が上がったということ、ひとつの勝利とみるべきでしょう。しかし、将来に對してチャレンジがあることは確かです。

すなわち、三十億の人口の生活の質を向上させるということ、これが大事だと思います。これは世界にとってもチャレンジであり、そしてアジアの人々、アジアの指導者に対してのチャレンジでもあると言えます。

これらの予測はあくまで現在の技術に基づいて申し上げたもの

ですから、将来はもっと楽観的になることができると思います。

技術の向上、例えば遺伝子工学、それから超電導などの技術を使うことにより、大きな突破口を見つけ、そして世界の人口扶養力を高めることができるであろうと思います。

そういうわけで、私は非常に楽観的に見ております。

しかしながら、技術的な開発を行い、そしてそれを人口のために、人類のために使うということが大変大事なことであると思います。

これは世界にとって、そしてアジアの国民、指導者にとって大事なことと言えますよう。

ありがとうございました。

7月1日

「アジア人口30億の日」

アナウンスメント発表

佐藤隆 A F P P D 議長

記念講演

「30億人をとり囲む環境問題」

堀内俊夫 環境庁長官

「アジアは30億人をどう支えるか」

ゲイル D・ネス ミシガン大学教授

記者会見、レセプション

7月17日

昭和63年度「アジア諸国の農村人口と農業開発に

24日

関する調査」予備調査のため、広瀬次雄事務局長、

遠藤正昭職員がネパールに出張。

7月28日

昭和63年度「東南アジア諸国等人口・開発基礎調

8月10日

査」調査団を中国に派遣。(団長・黒田俊夫、鷺尾

宏明、西川由比子)

8月14日

昭和63年度「農村人口と農業開発に関する調査」

30日

調査団をネパールに派遣。(団長・川野重任、結城

史隆、遠藤正昭)

9月12日

本協会理事会を開催。

(1) 昭和64年度事業計画・収支予算

(2) その他

於 赤坂プリンスホテル

財団法人 アジア人口・開発協会発足並びに議員活動

<p>一九七三・十 (十・十三～二十八)</p>	<p>アジア人口事情視察団派遣(インド、タイ、インドネシア、フィリピン)</p> <p>国会議員(日本)</p> <p>岸 信介(団長)、田中龍夫、八田貞義、佐藤 隆、山崎竜男、加藤シズエ、阿部昭吾</p> <p>その他</p> <p>W・ドレーパー、J・タイディングス、花村仁八郎、官庁、マスコミ関係等</p>
<p>一九七四・四・一</p>	<p>『国際人口問題議員懇談会』設立(会長・岸 信介) 衆・参超党派議員一一九名で発足。</p> <p>☆世界で初の試みである。</p>
<p>一九七四・四・二十五</p>	<p>『食糧と人口に関する宣言』：国連式典 (於・国連本部)</p> <p>宣言書署名・佐藤 隆</p> <p>○八月及び十一月の世界人口・食糧会議に先立ち、各国政府に現実的且つ果敢な諸政策を採るよう要請する五項目から成る。</p> <p>○人口・食糧問題解決の為、国連にリーダーシップをとることを要請した宣言文。</p>

<p>一九七四・八 (八・十九～三十)</p>	<p>「第三回 国際人口会議」 (於…ブカレスト) 総勢 四五〇〇人 齊藤邦吉(元厚生大臣)、八田貞義、佐藤 隆、 堂森芳夫、柏原ヤス、中沢伊登子 他</p>
<p>一九七四・十</p>	<p>「IPU列国議会同盟会議」 (於…東京) 参加国…六十五カ国 佐藤 隆代議士 「食糧と人口問題」ライス・バンク構想を 提唱。</p>
<p>一九七七・九 (九・三～十八)</p>	<p>中南米家族計画視察団(メキシコ、コロンビア、ブラ ジル、アメリカ、カナダ) 国会議員(八名) 岸 信介(団長)、佐藤 隆、住 栄作、 安孫子藤吉、和田耕作、阿部昭吾、福岡義登、 吉寺 宏、他 顧問団(十六名) 大来佐武郎、花村仁八郎 他 UNFPA二名、事務局五名 ○先進国にも、途上国にも、人口問題議員グループ を結成させるべく、各国立法府議員に呼びかけた。</p>

<p>一九七九・三</p>	<p>一九七八・十 (十・十六、十七)</p>	<p>一九七八・三 (三・二十八、三十)</p>	<p>一九七七・十二 (十二・五、十一)</p>
<p>IPOP国際会議準備委員会 (第三回) (於…メキシコ)</p> <p>日本側参加者…佐藤 隆 他</p> <p>○「宣言」の草案作成、○会議規定、○日程 etc</p>	<p>「IPOP国際会議準備委員会」 (第二回) (於…チュニジア)</p> <p>日本側参加者…佐藤 隆 他</p> <p>○開催国、○主催機関、○議題 etc、について</p>	<p>「人口と開発列国国會議員 (IPOP) 東京会議」 — 第一回 国際会議準備会議 —</p> <p>参加国…米、英、加、西独、インド、スリランカ、 メキシコ、ブラジル、コロンビア (九カ国 四十名)、日本 (十名)</p> <p>○運営委員メンバー国、○参加国、○議事日程、 ○予算</p>	<p>「人口と開発先進国会議」 (ロンドン、ボン、ベルリン)</p> <p>参加国…日、米、英、加、西独 (五カ国…十六名) 日本側…佐藤 隆、和田耕作、土井たか子</p> <p>○一九七七年九月の中南米視察に引続き各国立法院 議員への呼びかけ。</p> <p>○国際議員会議の開催について討議。</p>

<p>一九七九・八 (八・二十六) 九・二)</p>	<p>「IPOP国際会議」 (於スリランカ) 参加国…六十四カ国 他、国連各機関、IPPF等 総勢 五五〇名 日本側…岸 信介、佐藤 隆、石本 茂、中村啓一、 柏原ヤス ☆人口問題議員グループ、結成国二十五カ国を超 えるに到ったので、UNFPAに働きかけ、コ ロンボで開催。 一、「コロンボ宣言」採択 この宣言により、一九八一年、アフリカ、 ヨーロッパ、アジアの各大陸での人口会議 が開かれた。 一九八一年 七月 ケニヤのナイロビに 於て 十月 中国の北京に於て 十二月 仏、ストラスブール に於て 一九八二年十二月 ブラジルのリオデジ ヤネイロに於て (予定)</p>
<p>一九八〇・九 (九・十)十三)</p>	<p>「資源、人口、開発に関するアセアン国会議員代表者 会議」 (於クアラルンプール) 参加国…シンガポール、マレーシア、タイ、フィリ ピン、インドネシア(五カ国) 日本側…佐藤 隆、住 栄作、井上晋方 ○日本はオブザーバーとして参加をし、北京会議 開催を提案。合意を取付けた。</p>

<p>一九八〇・十一</p>	<p>「人口と開発に関するアジア国会議員会議」 日・中打合せ （於…北京） 佐藤 隆、井上普方 ○開催地北京への正式な可能性打診</p>
<p>一九八一・二二</p>	<p>「人口と開発に関するアジア国会議員会議」 第一回運営委員会 （於…東京） 参加国…日本、中国、インド、スリランカ、 マレーシア ○政治、イデオロギーの問題の除外について</p>
<p>一九八一・三・二十三</p>	<p>佐藤 隆代議士——国連開発計画（UNDP）と アドバイザー契約締結 ○一九七九年八月の「コロンボ宣言」に基づく、 地域IPOP会議の開催とそのフォローアップ を任務とする。</p>
<p>一九八一・六 （六・十九、二十）</p>	<p>「人口と開発に関するアジア国会議員会議」 第二回運営委員会 （於…北京） 参加国…日本、中国、インド、スリランカ 他 UNFPA 日本側…佐藤 隆、住 栄作、 土井たか子 他五名</p>

一九八一・十
(十・二十七～三十)

「人口と開発に関するアジア国会議員会議」

開催地…中国北京市
会場…人民大会堂

(1) 日本側出席者…

- | | | | | |
|-----|----|-----|----|---------|
| 1、 | 团长 | 福田 | 赳夫 | (衆・自) |
| 2、 | 佐藤 | 隆 | | (〃) |
| 3、 | 住 | 栄 | 作 | (〃) |
| 4、 | 関谷 | 勝 | 嗣 | (〃) |
| 5、 | 桜井 | 新 | | (〃) |
| 6、 | 栗山 | 明 | | (〃) |
| 7、 | 石本 | 茂 | | (参・自) |
| 8、 | 田代 | 由紀男 | | (〃) |
| 9、 | 林 | 寛子 | | (〃) |
| 10、 | 井上 | 晋方 | | (衆・社) |
| 11、 | 土井 | たか子 | | (〃) |
| 12、 | 福岡 | 義登 | | (〃) |
| 13、 | 川本 | 敏美 | | (〃) |
| 14、 | 片山 | 甚市 | | (参・社) |
| 15、 | 有島 | 重武 | | (衆・公) |
| 16、 | 柏原 | ヤス | | (参・公) |
| 17、 | 矢追 | 秀彦 | | (〃) |
| 18、 | 和田 | 耕作 | | (衆・民社) |
| 19、 | 柄谷 | 道一 | | (参・民社) |
| 20、 | 山口 | 敏夫 | | (衆・新自) |
| 21、 | 阿部 | 昭吾 | | (衆・社民連) |

秘書数名

同時通訳者

事務局 三名

<p>一九八一・十・三十</p>	
<p>(2) 議長…廖承志（中国全人代副委員長） 副議長…佐藤隆 他五名 司会…陳慕華（中国副総理） 起草委員…住 栄作 他五名</p> <p>(3) 主なる日程</p> <p>① 第一日目（十月二十七日） ○福田元首相の特別講演 ○福田元首相、国連平和賞受賞</p> <p>② 第二日目（十月二十八日） ○黒田俊夫博士の 「日本の人口変動の傾向と展望」講演</p> <p>③ 第三日目（十月二十九日） ○住代議士によるカントリー・レポート発表</p> <p>④ 最終日（十月三十日） ○北京宣言採択</p>	<p>「人口と開発に関するアジア国会議員会議 第三回運営委員会」（北京会議最終日同地にて）</p>

一九八二・二・十

財団法人アジア人口・開発協会 創立

☆北京会議時の第三回運営委員会に於て、発議された「アジア議員フォーラム」の活動母体として創された。

理事長…田中 龍夫(衆議院議員自民党総務会長)

副理事長…佐藤 隆(自民党副幹事長)

理事…住 栄作(自民党総務局長)

〃 〃 花村仁八郎(経団連副会長)

〃 〃 前田福三郎(日本電波塔(株)社長)

監事…斎田慶四郎(財家族計画国際協力財団 事務局長)

一九八二・三
(三・八・九)

「人口と開発に関するアジア議員フォーラム暫定委員会」 (於…ニューデリー)

参加国…六ヶ国…中国、日本、マレーシア、スリラ

ンカ、インド、オーストラリア

他機関…UNFPA、IPPF、AYCP

日本側…佐藤 隆、井上晋方 他人口問題専門家

○一九八一年十月三十日付「北京宣言」に

基づき「Asian Forum of Parliamentarians on Population and

Development (A. F. P. D.)」人口と

開発に関するアジア議員フォーラムを

を正式に発足。

○AFPFD発足に伴い、この委員会はそのままAFPFD第一回運営委員会となった。

<p>一九八二・十二 (十二・二一～五)</p>	<p>一九八二・八 (八・二一～三)</p>
<p>「人口と開発に関するブラジル会議」 (於…ブラジル)</p> <p>参加国…西半球諸国二十ヶ国</p> <p>議 題…西半球諸国の開発・人口・婦人の地位・ 子供の保護・移民の各問題について。</p> <p>宣 言…各国に「人口と開発に関する国内議員委 員会」を形成し、議題としてとりあげた 諸問題の改善に向け、積極的に努力する。</p>	<p>「人口と開発に関するアジア議員フォーラム第一回準備運営委員会」 (於…マニラ)</p> <p>参加国…日本、中国、インド、スリランカ、オース トラリア、フィリピン、他UNDP、UN FPA等</p> <p>議 長…佐藤 隆</p> <p>○準備委員会及び大会参加国等について (準備運営委員会役員にフィリピンが加わった)</p>

一九八三・三
(三・七〇九)

「元大統領・首相会議設立委員会」

(於…ウイーン、ホーフブルグ王宮)

主 催…人口と開発に関するグローバル・コミッテイ
共 催…国連開発計画(UNDP)
発起人メンバー…

日 本・福田赳夫元首相

ウイーン・ワルトハイム前国連事務総長

ルーマニア・マネスク元首相

セネガル・サンゴール前大統領

コロンビア・パストラーナ・ボレロ元大統領

チュニジア・ヌイラ元首相

オブザーバー…イギリス・ヒース元首相

第一回執行委員会…'83年5月東京で開催予定

本会議…'83年秋開催予定

一九八三・五
(五・十九〇二十)

元大統領・首相会議執行委員会

(於…東京)

福田赳夫元首相

ワルトハイム前国連事務総長

ボレロ元コロンビア大統領

第一回本会議…'83年11月中旬オーストリアで開催
予定

<p>一九八三・七・七</p>	<p>一九八三・十 (十・十一・十二)</p>
<p>財団法人アジア人口・開発協会理事会 厚生、外務、農林水産三省共管認可法人に拡大して 初の理事会で新たに次の十氏が理事に就任。</p> <p>〈人口・開発・食糧分野〉 理事…黒田 俊夫(日大人口研究所顧問) ”…川野 重任(東大名誉教授) ”…小林 和正(日大人口研究所教授)</p> <p>〈科学技術・エネルギー・資源分野〉 理事…本多 健一(東大工学部教授) ”…森 一久(日本原子力産業会議専務理事) ”…武田修三郎(東海大工学部教授)</p> <p>〈行政OB・官界〉 理事…内村 良英(元農林事務次官) ”…翁 久次郎(元厚生事務次官) ”…須之部量三(前外務事務次官)</p> <p>〈経済界〉 理事…房野 夏明(経団連総務部長)</p>	<p>「人口と開発に関するアジア議員フォーラム第二回準備運営委員会」 (於…バンコク)</p> <p>参加国…日本、中国、インド、フィリピン、 UNDP、UNFPA、IPPF 議長…佐藤 隆</p> <p>○大会参加国等について</p>

一九八三・十一
(十六、十八)

「元大統領・首相会議第一回総会」

(於…ウィーン、ホーフブルグ王宮)

主 催…人口と開発に関するグローバル・コミットテイ
共 催…国連開発計画(UNDP)

召集者…福田赳夫

議 長…クルト・ワルトハイム(前国連事務総長)
事務総長…ブラッドフォード・モース(UNDP事務総長)

構成国…(二十六カ国)

○日 本…福田 赳夫

○国 際 連 合…クルト・ワルトハイム

○カメルーン…アーマッド・アヒジョ

○イタリ ア…ジュリオ・アンドレオッティ

○ネパ ー ル…キルティ・ニデイー・ピスタ

○イギ リ ス…ジェームス・キャラハン

○フ ラ ン ス…ジャック・シャバン・デルマ

○タ イ ー …イックリマンサック・チョマナン

○ザ ン ビ ア…マテイアス・マインツア・チョーナ

○ハンガリー…イエノ・ホック

○オーストラリア…マルコム・フレージャー

○アルゼンチン…アルトゥーロ・フロンデシイ

○ス イ ス…クルト・フルグラ―

○レバ ノ ン…セリム・ホス

○ルーマニア…マネア・マネスキユー

○ジャマイカ…ミハエル・マンレー

○チュニジア…ヘデイー・ヌイラ

○ナイジェリア…オルセグン・オバサンジョ

○モ ロ ッ コ…アハメッド・オスマン

○コロンビア…ミサエル・パストラーナ・ボレロ

○ベネズエラ…カルロス・アンドレス・ペレ

<p>一九八四・二・十六</p>	<p>○ポルトガル ○ユーゴスラビア ○西ドイ ツ ○セネガル ○スウェーデン</p> <p>○マリア・ド・ルールド・ピントシルゴ ○ミチャ・リビッチ ○ヘルムート・シュミット ○レオポルド・セダール・サンゴール ○オラ・ウルステン</p>
<p>一九八四・二・十六</p>	<p>「人口と開発に関するアジア議員フォーラム第二回運営委員会」 (於…ニューデリー)</p> <p>参加国…日本、中国、スリランカ、インド、オーストラリア</p> <p>議長…佐藤 隆</p> <p>○第一回大会の具体的手順及び大会以降の展開について</p>
<p>一九八四・二 (十七、二十)</p>	<p>「人口と開発に関するアジア議員フォーラム第一回大会」</p> <p>開催地…インド・ニューデリー</p> <p>会場…ビギャン・パワン(国際会議場)</p> <p>参加者…三十一カ国、四十七機関…二百九十七名</p> <p>(1) 日本側出席者</p> <p>1、名誉団長 福田 赳夫(衆・自)</p> <p>2、団 長 佐藤 隆(〃)</p> <p>3、副団長 井上 普方(衆・社)</p> <p>4、 阿部 昭吾(衆・社民連)</p> <p>5、 矢追 秀彦(衆・公)</p> <p>6、 安孫子藤吉(参・自)</p> <p>7、 柄谷 道一(参・民社)</p> <p>8、 石井 一二(参・自)</p> <p>9、 倉田 寛之(〃)</p>

<p>一九八四・二・二十</p>	
<p>(2) 議 長…バルラム・ジャカール(インド国会議長) 司 会…サット・ポール・ミッタール(アジア アフォーラム事務総長) 起草委員…石井一二 他五名</p> <p>(3) 主なる日程</p> <p>① 第一日目(二月十七日) 福田赳夫元首相(グローバル・コミッテイ会 長)・歓迎挨拶 インデラ・ガンジーインド首相・歓迎挨拶 ヘルムット・シュミット西独前首相基調演説</p> <p>② 第二日目(二月十八日) 黒田俊夫博士「国家開発政策——人口と開発 の新たな次元」講演</p> <p>③ 第三日目(二月十九日) ランジット・アタパト・スリランカ厚生大臣 「スリランカ・住民参加」講演</p> <p>④ 最終日 ニューデリ宣言採択</p>	<p>「人口と開発に関するアジアフォーラム・各国代表者 会議」 参加国…AFPFD公式参加国(十六カ国) UNDP・UNFPA・IPPF 議 長…佐藤 隆 ○AFPFD活動方針と展望、今後の活動計画に ついて</p>

一九八四・八
(八・六十四)

「国連・国際人口会議」

(於…メキシコ)

参加国…百四十九カ国

日本政府首席代表・湯川宏厚生政務次官

日本政府顧問団

田中 龍 夫 (衆議院議員・自)
佐藤 隆 (衆議院議員・自)
水田 稔 (衆議院議員・社)
永井 孝 信 (衆議院議員・社)
矢追 秀 彦 (衆議院議員・公)
柄谷 道 一 (参議院議員・民)
石井 一 二 (参議院議員・自)
黒田 俊 夫 (厚生省人口問題審議会委員)
安川 正 彬 (厚生省人口問題審議会委員)

一九八四・八
(十五、十六)

「人口と開発に関する国際議員会議」(於…メキシコ)
参加国…六十カ国

日本代表団

福田 赳 夫 (衆議院議員・自)
田中 龍 夫 (衆議院議員・自)
佐藤 隆 (衆議院議員・自)
水田 稔 (衆議院議員・社)
永井 孝 信 (衆議院議員・社)
矢追 秀 彦 (衆議院議員・公)
柄谷 道 一 (参議院議員・民)
石井 一 二 (参議院議員・自)
三塚 博 (衆議院議員・自)

「第一回人口と開発に関するアジア国会議員代表者会議」
(於…東京・外務省国際会議室)

主催…財団法人・アジア人口・開発協会(APDA)

出席者…○日本…福田赳夫、田中龍夫、佐藤隆、住

栄作、関谷勝嗣、鹿野道彦、桜井

新(衆・自民)

安孫子藤吉、倉田寛之、石井一二

(参・自民)

井上普方(衆・社会)

矢追秀彦(衆・公明)

高桑栄松(参・公明)

塩田 晋(衆・民社)

柄谷道一(参・民社)

阿部昭吾(衆・社民連)

○オーストラリア…B・J・グッドラック

○中国…許濂新、何理良

○インド…S・P・ミッター

○インドネシア…マルトノ移住大臣

○韓国…モイム キン

○マレーシア…ラーマ オスマン交通副大

臣

○ネパール…ドロン シュム シャーラナ

○フィリピン…カルメンシータ レイエス

国務副大臣

○スリランカ…ランジット アタバト厚生

大臣

○タイ…ブンテイウム カマピラド運輸通

信副大臣

日程…第一日目（二月五日）

開会式 APDA 理事長・田中龍夫挨拶

内閣総理大臣・中曾根康弘（山崎拓内閣

官房副長官代理）

外務大臣・安倍晋太郎（森山眞弓外務政

務次官代理）

財団法人日本船舶振興会会長・笹川良一

（同財団理事長篠田雄次郎代理）

がそれぞれ祝辞

人口と開発に関するアジア議員フォーラ

ム事務総長・S・P・ミッター挨拶

感謝状贈呈 財団法人・日本船舶振興会

会長 笹川良一（二月五日夕、マツヤサ

ロンで贈呈）

国連人口活動基金事務局長 R・サラス

基調講演…国連人口活動基金事務局長

R・サラス

本会議…セッションI ランジットア

タパト・スリランカ厚生大臣を議長に選

出

セッションII 問題提起

中国人口基礎調査

黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長）

小林和正（日大人口研究所教授）

インド農村人口と農業開発調査

川野重任（東京大学名誉教授）

大内 穂（アジア経済研究所経済成長

調査部長）

<p>タイ人口と開発基礎調査・社会福祉関連調査</p> <p>黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長） 山本幹夫（帝京大客員教授・総合保健研究所長）</p> <p>日本の人口転換と農村開発 岡崎陽一（厚生省人口問題研究所長） 阿部 誠（厚生省人口問題研究所人口資質部長）</p> <p>日本の農業・農村開発と人口——その軌跡（スライド）</p> <p>第二日目（二月六日） セッションⅢ・Ⅳ 総括討論</p> <p>第三日目（二月七日） セッションⅤ 閉会</p>	<p>一九八五・四 （二十四～二十六）</p>
<p>「元大統領・首相会議第三回総会」 （於…パリ国際会議場）</p> <p>名誉議長…福田赳夫元首相 議長…ワルトハイム前国連事務総長 事務総長…ブラッドフォード・モースUNDP事務総長</p> <p>参加国…二十四ヶ国</p> <p>○それまでの、三つの主要課題に加え、人口問題が取り上げられることに決定。</p> <p>○第四回総会は、一九八五年四月、日本で開催される予定。</p>	

<p>一九八六・三 (三・三)五)</p>	<p>「第二回人口と開発に関するアジア国会議員代表者会議」 (於…東京・経団連国際会議場)</p> <p>主 催…財団法人・アジア人口・開発協会 (APDA)</p> <p>出席者…○日本 〓 福田赳夫、田中龍夫、佐藤隆、住 栄作、鹿野道彦、桜井新 (衆・自民)</p> <p>安孫子藤吉、林寛子、石井一二 (参・自民)</p> <p>水田稔、土井たか子 (衆・社会)</p> <p>矢追秀彦 (衆・公明)</p> <p>高桑栄松、塩出啓典 (参・公明)</p> <p>柄谷道一 (参・民社)</p> <p>○中国 〓 何理良</p> <p>○インド 〓 S・P・ミッタール、D・C・ジャ イン</p>
<p>一九八五・五 (十三)十四日)</p>	<p>「第二回人口と開発に関するインド議員会議」 (於…ニューデリー国際会議場)</p> <p>参加者数…約四百名</p> <p>○日本からは、佐藤隆代議士 (人口と開発に関するアジア議員フォーラム議長) が、開会式に来賓として出席、基調講演した。</p>
	<p>○佐藤隆代議士 (人口と開発に関する世界委員会常任理事) が、特別講演を行ない、OBサミットで人類の生存と平和を脅かす「人口問題」を取りあげるよう進言。その結果、主要課題の一つにすることを決定。人口問題に関するタスクフォースを組織し、主幹に福田赳夫元首相が就任することになった。</p>

- インドネシア || マルトノ移住大臣
- 韓国 || ジャンスック・キム
- スリランカ || P・M・B シリル県大臣
- タイ ブンテイウム・カマピラド運輸通
信副大臣

日 程・・第一日目（三月三日）

開会式（司会 林 寛子）

A P D A 理事長・田中龍夫挨拶

外務大臣・安倍晋太郎（浦野休興外務政
務次官代理）挨拶

国際人口問題議員懇談会会長・福田赳夫
歓迎挨拶

人口と開発に関するアジア議員フォーラ
ム事務総長・S・P・ミッター参加者
代表挨拶

国連人口活動基金事務局長 R・サラス
来賓挨拶

本会議・セッションI 住 栄作議員を議
長に選出

セッションI-1・2 問題提起

中国人口家族計画基礎調査

黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長）

小林和正（日大人口研究所教授）

インド人口・開発基礎調査

嵯峨座晴夫（早稲田大学文学部教授）

タイ農村人口と農業開発調査

川野重任（東京大学名誉教授）

原 洋之介（東京大学東洋文化研究所

助教授）

バンコクの人口都市化と生活環境・福祉
調査

黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長）

ネパール人口家族計画基礎調査

松本信雄（東京慈恵会医科大学教授）

大内 穂（アジア経済研究所経済成長
調査部長）

日本の人口都市化と開発

黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長）

岡崎陽一（厚生省人口問題研究所長）

日本の都市化と人口（スライド）

セッションⅠ―3 討議

第二日目（三月四日）

セッションⅡ（議長 住栄作議員）

各国カントリレポート及び討議

セッションⅢ（議長 佐藤 隆議員）

総括討議

閉会式

第三日目（三月五日）

都内視察

<p>一九八六・五 (五・十二、十六)</p>	<p>「人口と開発に関するアフリカ国会議員会議 開催地…ジンバブエ・ハラレ市 参加国…三十九ヶ国 主催…人口と開発に関する国会議員世界委員会 ジンバブエ議会 *『ハラレ宣言』採択 ○アフリカの議会制度を持つ国は三十六ヶ国、 この内三十一ヶ国と議会制度を持たぬ国八ヶ 国がオブザーバーとして参加したが、これは アフリカにおいて過去開催された議員会議の 中で最大規模のもの。</p>
<p>一九八六・九 (九・二十六、十二)</p>	<p>ネパール人口事情視察議員団派遣 参加議員(計十名) 福田赳夫(名誉団長)、田中龍夫(団長)、 佐藤 隆、桜井 新、金子みつ、矢追秀彦、 安倍基雄、扇 千景、石井一二、高桑栄松 ○ネパールに発足したての人口・開発議員連盟 等との会議も行なわれた。</p>
<p>一九八六・十 (十・六、七)</p>	<p>「人口と開発に関するアフリカ議員カウンシル」発足 会議 開催地…ケニヤ・ナイロビ市 参加国…アフリカ十三ヶ国、他五ヶ国、他九機関 ○同年五月十六日付ジンバブエにて採択された 「ハラレ宣言」に基づき、アフリカ地域におけ る各国の人口・開発議員グループ間での意見 交換等の活動を調整・促進、また「ハラレ宣 言」をフォローする等のため同カウンシルを 正式に発足したもの。 初代議長には、マダガスカルジャン・ルイ・ ラマンドライソア氏が就任。</p>

<p>一九八六・十 (十・十七、十八)</p>	<p>「人口と開発に関するアジア議員フォーラム運営委員会」 (於…ジャカルタ)</p> <p>参加国…日本、中国、スリランカ、インド、シリア、インドネシア、他八機関</p> <p>議長…佐藤 隆(日本)</p> <p>○第二回 A F P P D 総会を一九八七年十月二十三日、北京にて開催することを正式に決定。</p>
<p>一九八七・二 (二・二十三)</p> <p>二十四</p>	<p>「第三回人口と開発に関するアジア国会議員代表者会議」 (於…バンコク・タイ国国会議事堂 エスカップ会議場)</p> <p>主催…財団法人アジア人口・開発協会 (A P D A)</p> <p>出席者…○日本…福田越夫、佐藤隆(衆・自民)</p> <p>林寛子、石井一二(参・自民)</p> <p>伊藤忠治(衆・社会)</p> <p>有島重武(衆・公明)</p> <p>阿部昭吾(衆・社民連)</p> <p>○中国…ヤン・レン・ヤン、何理良</p> <p>○インド…S・P ミッタール、M・プラシヤド</p> <p>○インドネシア…マルトノ移住大臣</p> <p>○韓国…K・J・ドンク</p> <p>○マレーシア…R・オスマン運輸副大臣</p> <p>○ネパール…D・S・ラナ、P・B・サポクタ</p> <p>○シリア…H・サディック</p> <p>○スリランカ…U・B・ウイジェクーン</p> <p>(ジャフナ自治大臣)</p>

○タイⅡプラソップ・R、M・L・トリド
シュス、V・ビトゥーン・O、プ
アングルト・W、プーンスク・L

日 程…第一日目（二月二十三日）

開会式（於…タイ国会議事堂会議場）

開会の辞…ウクリット・M（タイ国国会

議長）

主催者挨拶…佐藤隆（APDA副理事長）

来賓挨拶Ⅱ J・S・シン（サラスUNF

PA事務局長・代理）

来賓挨拶Ⅰ 福田赳夫（国際人口問題議員

懇談会会長）

主催国挨拶Ⅱ プラソップ・R（タイ国人

口問題議員懇談会会長）

本会議…セッションI 問題提起・質疑

応答

（於…エスカップ・会議場）

議長…

インドネシア 人口・開発基礎調査

黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長）

インドネシア 農村人口と農業開発調査

原 洋之介（東大東洋文化研究所助教

授）

タイ 村落レベルでの人口と開発

ミツチャイ・V（PCDP事務局長）

第二日目（二月二十四日）

セッションI-2 問題提起・質疑応答

（於…エスカップ会議場）

	<p>現在及び将来の開発計画に関する年齢構造変動の政策的合意</p> <p>ニボン・デババルヤ（エスカップ人口部部長）</p> <p>日本の労働力人口と開発</p> <p>黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長）</p> <p>日本の産業発展と人口（スライド・制作APDA）</p> <p>セッションII-1/2</p> <p>各国カントリーレポート発表および討議</p> <p>総括討議</p> <p>閉会式</p>
<p>一九八七・九 (九・二三～二五)</p>	<p>「人口と開発に関するアジア議員フォーラム第二回大会」</p> <p>期 日…九月二十三日～二十五日</p> <p>開催地…中国・北京市</p> <p>会 場…人民大会堂、崑崙ホテル国際会議場</p> <p>参加者…二十九ヶ国、十六機関…約二百名</p> <p>(1) 日本代表出席議員</p> <p>名誉団長…福田 赳 夫（衆・自民）</p> <p>団 長…佐藤 隆（衆・〃）</p> <p>谷 津 義 男（衆・〃）</p> <p>林 寛 子（参・〃）</p> <p>田 代 由紀男（参・〃）</p> <p>石 井 一 二（参・〃）</p>

副団長…井上普方(衆・社会)

城地豊司(衆・〃)

有島重武(衆・公明)

矢追秀彦(衆・〃)

高桑栄松(参・〃)

三治重信(参・民社)

阿部昭吾(衆・社民)

(2) 議長…佐藤隆(日本)

副議長…胡克實(中国)

〃…P・ラタナクーン(タイ)

〃…M・チョードウリー(バンクグアデシュ)

起草委員…G・S・ヤジャン(インド)

ツアン・ツォングリー(中国)

矢追秀彦(日本)

R・ラモス・シャハニ(フィリピン)

B・グッドラック(オーストラリア)

(3) 主なる日程

① 開会式

* 趙紫陽・中国首相、他の挨拶

* 福田赳夫・日本国元首相の基調講演

② セッション

① アジアの人口と開発

② アジアの保健サービス・家族計画

③ 都市化

④ アジアの人口と食糧

⑤ 人口高齢化

③ AFPPD北京宣言採択

④ AFPPD規約採択

⑤ AFPPD役員改選(9ヶ国)

* 議長には佐藤隆議員(日本)が再任された。

<p>一九八七・九 (九・二六)一九</p>	<p>中国人口事情視察議員団派遣(山東省)</p> <p>団長…有島重武(衆・公明)</p> <p>谷津義男(衆・自民)</p> <p>城地豊司(衆・社会)</p> <p>高桑栄松(参・公明)</p> <p>三治重信(参・民社)</p> <p>他、随行者7名</p> <p>*中国・国家計画生育委員会との協力で、山東省にて実施されている家族計画プロジェクトを視察。</p>
<p>一九八八・二一)三 (二・二九)三・一)</p>	<p>「第四回人口と開発に関するアジア国会議員代表者会議」</p> <p>(於…クアラルンプール・マレーシア国会議事堂 パンパシフィックホテル・ボールルームB)</p> <p>主催…財団法人アジア人口・開発協会(A.P.D.A)</p> <p>共催…マレーシア人口・資源・開発議員連盟</p> <p>出席者…○日本…田中龍夫(衆・自)</p> <p>林寛子、石井一二(参・自)</p> <p>坂上富夫(衆・社)</p> <p>有島重武(衆・公明)</p> <p>三治重信(参・民社)</p> <p>○オーストラリア…B・J・グッドラック</p> <p>○中国…胡克実</p> <p>○インド…J・R・グプタ</p> <p>○韓国…K・J・ドンク</p> <p>○ネパール…P・B・シャヒ</p> <p>○ニュージーランド…S・デイビス</p> <p>○シンガポール…S・サニフ</p> <p>○スリランカ…R・アタバト</p>

○シリアⅡG・タヤラ

○タイⅡブラソップ・R、チュムサイ・H

○マレーシアⅡA・H・A・バダウィ、P・

H・ラーマ・オスマン、A・

H・イブラヒム、Z・A・ジ

ン、M・ザカリア、I・M・

サイド、Z・M・ハッサン、

A・R・ベイカー、S・S・ス

ブラマニアム、M・T・イス

マエル、C・J・メン

日程：第一日目（二月二十九日）

開会式（於：マレーシア国会議事堂会議
場）

主催者挨拶：田中龍夫（APDA理事長）

共催者挨拶：A・バダウィ（マレーシア

人口・資源・開発議員連盟

会長）

来賓挨拶：胡克実（AFPFD副議長）

来賓挨拶：J・S・シン（N・サディッ

クUNFPA事務局長・代理）

主催国挨拶：モハメッド・ザヒール（マ

レーシア国下院議長）

本会議：セッション I—1

問題提起・質疑応答

（於：パンパシフィックホテル・ボ

ールルームB）

中国——人口・開発基礎調査

黒田俊夫（日本大学人口研究所名誉

所長）

	<p>中国 ― 農村人口と農業開発調査 濱下武志（東京大学東洋文化研究所 助教授）</p> <p>マレーシア ― 都市化・人口移動・開 発 K・サレイ（マレーシア経済研究所 所長）</p> <p>マレーシア ― 農業と農村開発 K・カチャ（農業大学副総長）</p> <p>アジア諸国の人口と農業政策 G・D・ネス（ミシガン大学教授）</p> <p>第二日目（三月一日）</p> <p>スライド“日本の人口移動と経済発展” （APDA制作）</p> <p>セッションII 各国カントリーレポート発表および討 議</p> <p>総括討論</p> <p>閉会式</p>

本協会実施調査報告書及び出版物

昭和58年度

1. 中華人民共和国人口家族計画基礎調査報告書
Basic Survey on Population and Family Planning
in the People's Republic of China (英語版)
生育率和生活水平关系中日合作調査研究報告書
(中国語版)

昭和59年度

1. アジア諸国の農村人口と農業開発に関する調査報告書
— インド国 —
Report on the Survey of Rural Population and
Agricultural Development in Asian Countries
— India — (英語版)
2. 東南アジア諸国等人口・開発基礎調査報告書
— タイ国 —
Report on the Basic Survey of Population and Deve-
lopment in Southeast Asian Countries
— Thailand —

3. 日本の人口転換と農村開発

Demographic Transition in Japan and Rural Deve-
lopment (英語版)

4. Survey of Fertility and Living Standards in Chinese
Rural Areas — Data — All the households of two
villages in Jilin Province surveyed by questionnaires
(英語版)

关于中国农村的人口生育率与生活水平的调查报告
— 对于吉林省两个村进行全戸面談调查的结果 —
— 统计編 — (中国語版)

5. スライド 日本の農業、農村開発と人口

— その軌跡 — (日本語版)

Agricultural & Rural Development and, Population
in Japan (英語版)

日本农业农村的发展和人口的推移 (中国語版)

Perkembangan Pertanian, Masyarakat Desa Dan
Kependudukan Di Jepang (インドネシア語版)

(以上4カ国版スライドは、日本産業教育スライドコ
ンクールにて優秀賞を受賞しました。)

昭和60年度

1. アジア諸国の農村人口と農業開発に関する調査報告書
——タイ国——
Report on the Survey of Rural Population and
Agricultural Development in Asian Countries
——Thailand—— (英語版)
2. 東南アジア諸国等人口・開発基礎調査報告書
——インド国——
Report on the Basic Survey of Population and
Development in Southeast Asian Countries
——India——
3. 中華人民共和国人口・家族計画第二次基礎調査報告書
Basic Survey (II) on Population and Family Planning
in the People's Republic of China
生育率和生活水平关系第二次中日合作調査研究報
告書 (中国語版)
4. ネパール王国人口・家族計画基礎調査
Basic Survey Report on Population and Family
Planning in the Kingdom of Nepal (英語版)

5. 日本の人口都市化と開発
Urbanization and Development in Japan (英語版)
6. バンコクの人口都市化と生活環境・福祉調査
——データ編——
Survey of Urbanization, Living Environment and
Welfare in Bangkok ——Data——
(英語版)
7. スライド
日本の都市化と人口 (日本語版)
Urbanization and Population in Japan (英語版)
日本的城市化与人口 (中国語版)
Urbanisasi Dan kependudukan Di Jepang
(インドネシア語版)

昭和61年度

1. アジア諸国の農村人口と農業開発に関する調査報告書
——インドネシア国——
Report on the Survey of Rural Population and
Agricultural Development in Asian Countries
——Indonesia—— (英語版)

2. 東南アジア諸国等人口・開発基礎調査報告書
——インドネシア国——
Report on the Basic Survey of Population and
Development in Southeast Asian Countries
——Indonesia——（英語版）
3. 在日留学生の学習と生活条件に関する研究
—— 人的能力開発の課題に即して ——
4. 日本の労働力人口と開発
Labor Force and Development in Japan（英語版）
5. 人口と開発関連統計集
Demographic and Socio-Economic Indicators on
Population and Development（英語版）
6. スライド 日本の産業開発と人口
——その原動力・電気——（日本語版）
Industrial Development and Population in Japan
——The Prime Mover-Electricity——（英語版）
日本の产业发展与人口
——其原动力—曳气——（中国語版）
Pembangunan Industri dan kependudukandi Jepang
——Penggerak Utama-Tenga Listrik——
（インドネシア語版）

7. ネパール王国人口家族計画第二次基礎調査
Complementary Basic Survey Report on Population
and Family Planning in the kingdom of Nepal

昭和62年度

1. アジア諸国の農村人口と農業開発に関する調査報告書
——中華人民共和国——
Report on the Survey of Rural Population and
Agricultural Development in Asian Countries
——China——（英語版）
2. 東南アジア諸国等人口・開発基礎調査報告書
——中華人民共和国——
Report on the Basic Survey of Population and
Development in Southeast Asian Countris
——China——（英語版）
3. アジア諸国からの労働力流出に関する調査研究
——フィリピン国——
4. 日本の人口と農業開発
Population and Agricultural Development in Japan
（英語版）

5. ネパールの人口・開発・環境

Population, Development and Environment in Nepal
(英語版)

6. スライド

日本の人口移動と経済発展 (日本語版)

The Migratory Movement and Economic Development in Japan (英語版)

日本的人口移动与经济发展 (中国語版)

Perpindahan Penduduk Dan Perkembangan Ekonomi Di Jepang (インドネシア語版)

7. トルコ国人口家族計画基礎調査

昭和63年9月30日発行（季刊）

「アジア 人口と開発」 №26

発行者 田中龍夫

発行所 財団法人 アジア 人口・開発協会

〒100 千代田区永田町2-10-2

永田町TBRビル710号

TEL 03(581)7770(代表)